

読書ノート

佐藤 厚 著

『キャリア社会学序説』

谷内 篤博

(文京学院大学経営学部教授)

7・5・3現象に象徴される若年層の早期離職問題、新卒無業者、大卒フリーターなど背景にした大学におけるキャリア支援、昇進をめぐるキャリア・プラト現象など、働くわれわれを取り巻く環境は大きく変化しており、こうした労働環境の変化を反映してキャリアに関する書籍が多く刊行されている。

しかし、こうした書籍の多くはキャリア論に関する入門書や啓蒙書であったり、あるいはキャリア形成に関するハウ・ツー本である。本書は、これまで刊行されてきたキャリアに関する書籍とは大きく趣を異にしており、著者自身が関わってきた調査研究プロジェクトの研究成果をベースに、実証的な見地から、さらには労働経済学、人的資源管理などの学際的な見地からキャリア形成、人材育成のあり方を探究している。

本書の特徴としては、大きく3つあげられる。まず1つ目は、正社員だけでなく、非正規社員を含め、若年層や団塊の世代を中心とした高齢者など幅広い被験者を対象に、働き方やキャリア意識を分析している点である。正社員を中心に、そのキャリア形成やキャリア意識を論述する書籍が多いなか、本書は正規と非正規を含めた雇用形態別に、仕事意識とキャリア意識を比較分析しており、これまでのキャリアに関する書籍ではあまり見られない新たな知見を提供している。

本書の2つ目の特徴は、X型キャリアからY型キャリアへのパラダイムチェンジを提唱している点である。著者は本書のなかで、従来のキャリア形成を内部労働市場をベースにした「X型キャリア」と定義するとともに、今後は横断的な職業別労働市場



●泉文堂
2011年4月刊
A5判・242頁・3045円
(税込)

●さとう・あつし
イン学部教授。
法政大学キャリアデザ

をベースにした「Y型キャリア」への移行が高まることを中小サービス業の事例を通して明らかにしている。若年層のプロフェッショナル志向の高まりやそれに伴う離・転職行動、エンプロイアビリティに対するニーズの高まりなどを背景に、わが国においても横断的労働市場をにらんだ「境界線なきキャリア」(boundaryless career)へのニーズは高まりつつある。問題はこのような横断的労働市場におけるキャリア形成や職業能力の評価であり、社会的な職業能力評価制度の必要性を指摘する著者の主張は今後のわが国における本格的な職業別労働市場の形成・整備に向けて多くの示唆を与えるものと思われる。

本書の特徴の最後は、労働者の類型化と類型間の比較分析を試みている点である。本書では、仕事のやりがい感とワーク・ライフ・バランス(WLB)満足度を軸に、労働者を4つに類型化し、過去のキャリアと将来のキャリア志向、仕事特性・職場特性に関して類型間の比較分析を行い、著者なりの一定の帰結を導き出している。

WLBに関しては、労働力の女性化、3L(Working Life, Family Life, Social Life)の充実、労働の人間化(QWL)のさらなる深化の観点から、その重要性が指摘されているが、キャリア志向との関連において論究されることは少なく、そうした意味においても本書の存在は大いに意義があるものと思われる。

る。

最後に、本書を読み終えて、この先に期待したいことを指摘し、まとめとしたい。本書は全体的なスケルトン (skeleton) がワークキャリア、すなわち狭義のキャリアを中心に構成されており、広義のキャリアともいうべきライフキャリアに関する言及がほとんどなされていない。われわれ働く人びとにとって、それぞれの領域で職業能力を高め、キャリアアップやキャリア形成を図ることは、大いに価値

があり、個人にとって生きがいにつながる。しかし、そうしたワークキャリアの充実が人生における最終目標ではない。われわれの人生や生活のなかで、仕事の中心性は高いが、人生における仕事以外の役割と仕事生活とバランスさせることは極めて重要である。今後は、ワークキャリアとライフキャリアとの統合を試みた広義のキャリアの視点から、著者の研究がさらに進化することを期待したい。